インテリア計画研究室

Interior Planning Lab.

山本 麻子

YAMAMOTO, Asako / Associate Professor

記憶に残る和公園

Memorable Japanese park

建築空間を創出する際にその形を決める要素は敷地条件・コスト的制約・歴史や文化など様々な要素がある。例えば住宅では、建築主の過去の記憶である「住経験」から創られた建築に対する個人的な考え方である「住居観」が大きな要素の一つとなる。そこで自分自身の記憶からこれからも大切にしたいと思う場所と光景を選定し、その場所がこれから様々な人々の記憶に残る光景となる空間デザインを提案する。

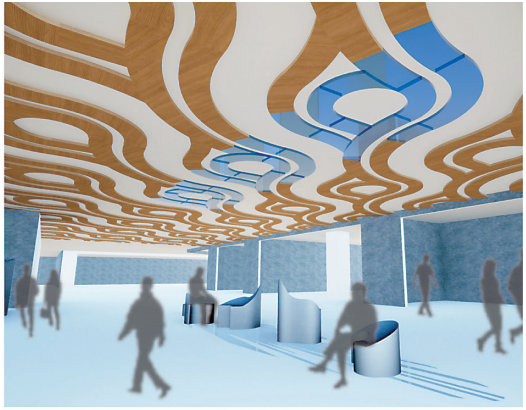
自分自身がこれからも大切にしたいと思う場所として大阪府八尾市にある公園を選定する。そしてその公園に周辺住民が集まる光景を大切にするとともに、日常の一コマとして人々の記憶に残る公園を再計画する。また近年の公園の問題点や周辺地域の問題点の解決の手助けとなる計画も行う。

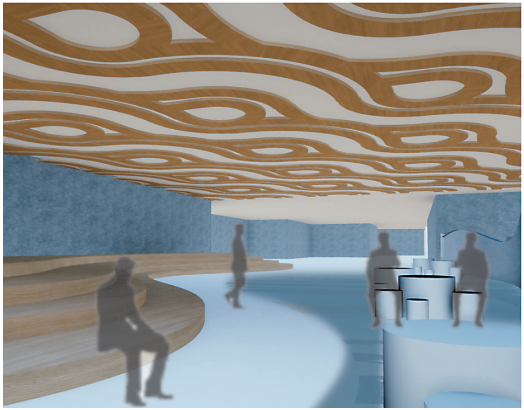
上北 真也

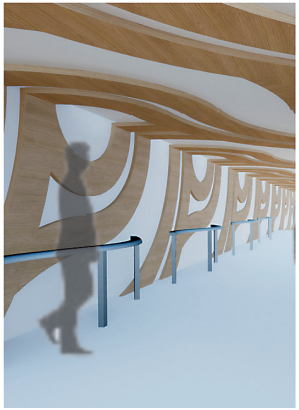
UEKITA, Shinya

時間を紡ぐ　駅でのひとときを考える

Spinning time: Considering a moment spent at the station







私は時間の逆算が苦手だ。外出時であれば何時に家を出ればいいか、何分発の電車に乗ればいいかなど、時間について考えることが多い。このように、時間について考えることは日々のストレスになっているのではないかと考えた。

そこで、阪急電車・大阪梅田駅の構内にある余白の空間に「時間に囚われない空間」をつくる。これにより、今以上に使いやすいだけでなく、時間について考えるストレスが減るのではないかと考えた。

製作を進めるにあたり、コンセプトを「水」とした。これは、私は大阪梅田駅から阪急電車を利用する際、淀川を横切るときに見る水の流れが好きだからだ。

本制作では、前述の課題とコンセプトを元に、水に関連する言葉を体現した椅子や装飾のデザインを提案する。次の予定まで時間がある人、一息つきたい人など、それぞれの状況に応じた空間を提供することで、水のように自由に、時間に囚われないひとときを過ごすことができる。

審査会賞
（インテリア部門 第2位）

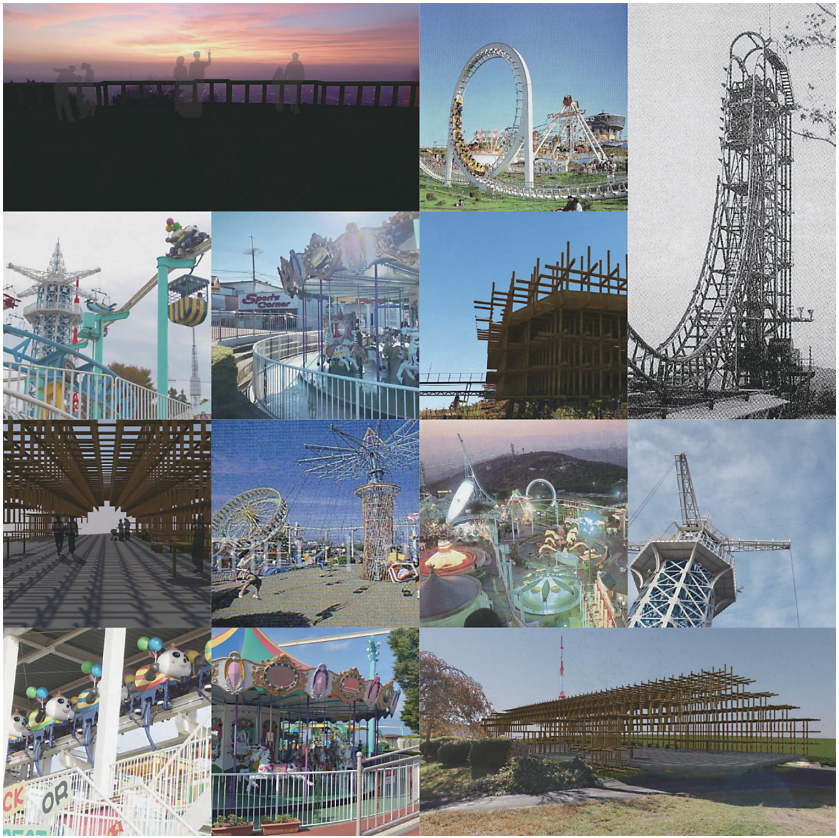
江波 紅葉
ENAMI, Kaede

過去と未来が交差する生駒山上遊園地

Ikoma Sanjo Amusement Park where past and future intersect

地方遊園地が衰退する中で現在まで残ってきた、大阪と奈良の県境にある生駒山の山頂に位置する生駒山上遊園地。90年という長い歴史を持つ中で時代に合わせて変化してきた。一部の遊具は戦時中に監視塔として使われ、80年代に入ると若者の絶叫系遊具では回転コースターや山頂という立地を生かした遊具を設置した。その後、大型テーマパークの登場によって来場者数が激減するも入場料無料や絶叫系遊具の撤廃、閑散期である冬季を休園にして営業を続けてきた。近年、テーマを変え、ファミリー向けに絞ったことで来場者が回復しつつある。さらに、レトロな乗り物や遊園地から見える夜景が若い世代に注目されつつある。

そんな時代に合わせ変化し適応してきた生駒山上遊園地をこれからも残していく為に名産である竹を使った持続且つ可変可能な建物を提案する。

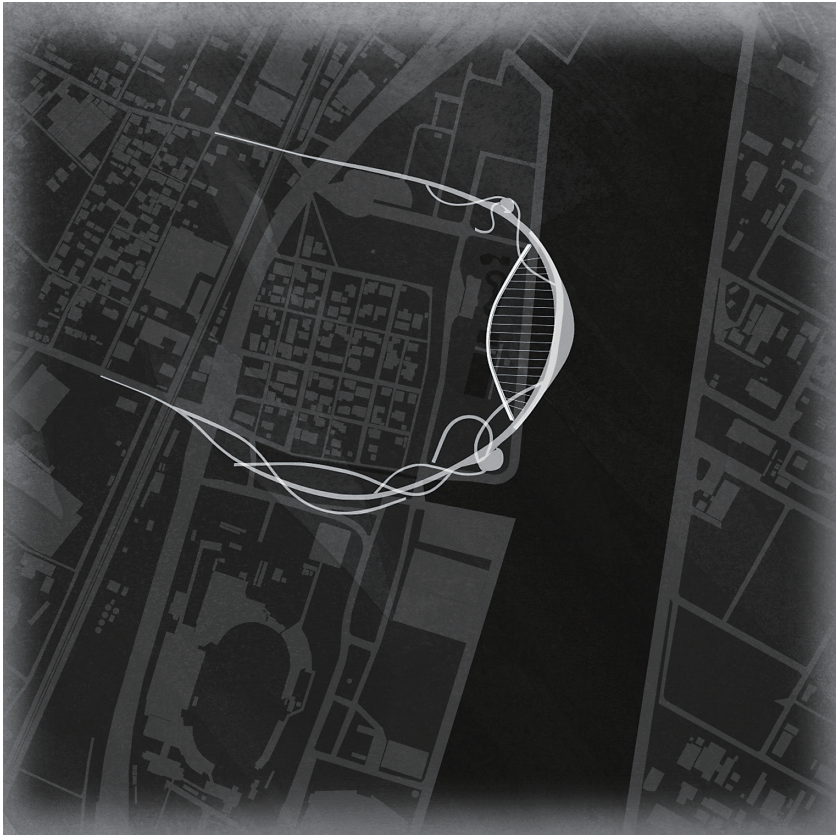


繪馬 僚哉

EMA, Ryoya

景観を生かす　工場景観へいざなう遊歩道

Taking advantage of the scenery: Promenade leading to the factory scenery



夜景遺産に登録されている四日市コンビナートの工場景観を生かす。

三重県　四日市市の港に位置するコンビナートは、過去に公害の災害があり人々から疎んじられる存在であったが、現在は形を変え稼働している。

港には、公園やプール、スポーツ施設、イベント会場など孤立した施設がある。

性別年齢問わず多くの人が利用するが、国道と線路があり港と市街地と分断され、人が行き交うには難しい環境にある。

そこで国道と線路を跨ぎ、工場景観へといざなう遊歩道を提案する。

遊歩道は周辺の施設をつなげる役割を持ち、日中は人が行き交う道となり、夜は工場夜景を眺める場となる。

港と市街地をつなげる架け橋となる。

大林 紗羅
OBAYASHI, Sara

中高生のための下町空間　10代のなにげない日常を記憶に残す

Suburban space for junior and senior high school students: Keeping teenage ordinary daily life in memory

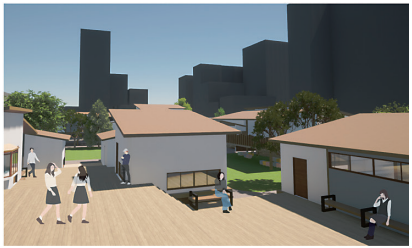
中高生はどこで遊んでいるのだろうか。

私の地元である守口市は近年、お年寄りのための施設が増え、公園は幼い子のための場所に変わっており、中高生のための施設は無くなっている。そのため、中高生は都心まで足を運ぶ。しかし、交通費などの理由により頻繁に訪れられないことから、友達との日常は下町で過すことになる。

学生時代のかけがえのない時間、なにげない日常を記憶に残すために、守口市に中高生のための複合施設を提案する。

中高生が周りの目を気にせず過ごせるようにするために、公共施設をメインにし、その中に低額で利用できる商業施設を点在させた。さらに、周りの目から隠れるプライベートスペース、新しい人と出会うパブリックスペースを設け、日常の様々なシーンで利用できるようにした。

いつものあの子と喋る
クラスで集まる
知らない人と出会う
離れたあの子と再会する
そんな日常が過ごせる居場所になるように。



インテリア部門賞

奥田 奈月

OKUDA, Natsuki

つなぐ　古民家×ワークスペース

connect: Old Japanese-style house × workspace

空き家増加や地方高齢化が問題となっている現代。使われなくなった住居は解体費用削減のため現在もたくさん放置されている。さらに昔に比べ新築物件を安価に建てられるため、中古の空き家が活用されない。しかし、近年増加しているリモートワークをきっかけに地方移住が注目されている。そこで田舎の古民家をリノベーションし、田舎暮らしの魅力や古民家の温かさを感じることができる施設を提案する。

敷地は大阪府泉佐野市にある祖父母の住居。周辺は畑が多く自然豊か。この場所で田舎暮らし体験をし、地方移住のきっかけを作る。また、リモートワークが出来る場所がこの地域には少ない。そこで家以外の場所で集中して仕事が出来るシェアオフィスを設けた。畑の横の小屋では地域のおじいちゃんおばあちゃんが集まり談笑する。地域住民と移住者をつなぐことで田舎ならではの心地よいコミュニケーションを知り今までの田舎暮らしが未来へとつながる。

楠本 唯華
KUSUMOTO, Yuika

MY FRIEND　モンテッソーリ教育から考える乳幼児用椅子の提案

MY FRIEND: Proposal of chairs for preschool children based on Montessori education

幼児用の家具やおもちゃを見て可愛いと感じる人は多いのではないか。

何気ない色使いやデザインに思えるが、きっと意味があるのだろう。

日本でも有名な幼児教育である“モンテッソーリ教育”では、物理的環境と呼ばれる教具や家具、建物などが重要視され、物理的環境に共通の８つの性質を基に物理的環境は考えられていることを知った。そこで私は、“モンテッソーリ教育”から考える乳幼児用椅子の提案をすることにした。対象年齢は、“モンテッソーリ教育”の敏感期（0歳から6歳）の中でも、無意識に全てのことを吸収する時期といわれる0歳から3歳までとした。物理的環境に共通の８つの性質や色が与える効果などから、合板と色紙を交互に重ね合わせる方法で乳幼児用椅子の制作をし、また、キャラクターを用いた知育要素も取り入れた。

「MY FRIEND」が子供たちの人生にとって良い影響を与えることを願う。

小泉 未来
KOIZUMI, Miku

都市空間とスケボー文化の共生

Coexistence of urban space and skateboard culture

皆さんはスケートボードにどんなイメージを持っているだろうか。中にはあまりいいイメージを持たない人も居るだろう。オリンピックの影響で世間の目は変わってきているが、現在の日本ではスケートボードを滑る場所が少ない。スケートパークはアクセスが不便なところが多いためスケーター達は都市部の路上で滑り、建物の損壊事故を起こしたり、近隣住民や通行人への事故や迷惑行為という問題が発生しており、社会との溝はますます深まるばかりである。

そこで、中之島公園に人々が安全に利用できるスケートボード施設を建設する。

公園の一般利用者とスケーターが共生できるような都市空間として公園の中にスケボーショップを配置し、一般人もスケートボードに興味を持つきっかけを生む。また、都市に集まる人々の憩いの場も併設することで都市住民のレクリエーションの場であるとともに快適安全な都市空間を作る事ができる。

スケートボードで滑る空間と一般人が利用する空間を織り交ぜることで都市空間との共生を目指す。

田村 健

TAMURA, Ken

溜り

Accumulating hot spring

私は地元摂津市に温泉が欲しい。

私にとって温泉とは日々の疲れが癒され、友人と何も隠さず裸でお湯に浸かりながらコミュニケーションをとれる素晴らしい場所である。

摂津市は商業施設が少ないため、出かけるとなったら市外に出ないといけない。

そのため、摂津市に住んでいる人達が家族や友人などと摂津市の中で集まってくつろげる場所をつくることにした。

源泉が溜まった地下に人々が集まる、そんな溜り場である。

中川 裕斗
NAKAGAWA, Yuto

蓄積するモノと記憶　廃材を用いた循環型リノベーションの提案

Objects and memories accumulated: Proposal of recycling-oriented renovation using waste materials

先人の知恵、生活の知恵が残る集落。集落は人口流出、住み手の高齢化により集落維持は難しい状態となっている。また、都市部に比べて空き家の増加が多く見られている状態であり、空き家の問題としては残置物が多くすぐに賃貸として人に貸し出すことが出来ない状態である。

そこで自身が集落の一軒の空き家を対象に住み始め、改修を行い、その際にでた建築資材や残置物、街の廃材を利用しながら、新しく作られたハナレや空き家の空間を形成していく。

街のモノを利用することで地域性や独自性を明らかにすることで愛着が持てる街を形成していき、モノと人々が循環できるような集落を計画する。

山元 大士
YAMAMOTO, Hiroto